

舞台芸術の創造体験でみられる コミュニケーション・スキルの向上について

— 「舞台美術」模擬授業の合評会を通して—

On the Improvement of Communication Skill Observed in the Experience of
Creating in the Performing Arts

— Chiefly through the Meeting for Joint Review of the Class Simulation of Scenic Designs —

上田 淳子
(Junko UEDA)

キーワード：舞台美術、合評会、コミュニケーション・スキル、相互尊重の自己表現

Key Words：scenic design, joint review meeting, communication skill,
self-expression based upon the mutual respect

I. はじめに

1. 問題

近年、コミュニケーション・スキルの向上を目指した研究は数多く報告され、小学生から大学生まで幅広い年代が対象となっている。その背景には、自らの手で人間関係を広げ深める力不足（萩原・秋光，2013）、対人的な交流の苦手からうまくいかない友人関係（山本・菅野，2013）、他人に関与されない「ひとりの時間」を大切にしている（増淵（海野），2013）など、現代の若者についての特徴が挙げられ友人関係に気を使いながら交友をしている青年は精神的に疲労した状態にあることも示されている（堀・松井，1981）。この様なことから、現代の若者のコミュニケーション・スキルの向上につながる育成が様々な分野で求められているものと思われる。

若者が他者との深い関わりを避ける傾向について磯貝（1992）福富（1997）は、明確に自分の気持ちを表明することによる軋轢を避けようと集団から逸脱しないようにする為の自己防衛反応¹⁾であるとし、自分の感情などに応じた表現方法や手段が分からないことに基因するものであるとしている。また、コミュニケーション手段の一つである言語について富田（2013）は、大学生の議論力について多くの学生が即興性を求められる過程を苦手としていると述べている。

これら若者の対人面にみられる特徴的な態度、自己防衛意識から他者に本心で向き合ってい

うえだじゅんこ：目白大学短期大学部非常勤講師

ないと思われる傾向、そして、ことばを発し議論する過程に対して抱いている苦手意識などの問題点を視野に検討することで、コミュニケーション能力の改善が期待できるものと思われる。

2. 教育現場でのアサーション・トレーニング (AT) の取り組み

他者と円滑なコミュニケーションを図る為には、自分の意志や考えを表現するところから始まる。アサーションは、自己と他者を共に尊重し他者と正直に率直に向き合う自己表現である。アサーションについて平木 (2009) は、「アサーティブな発言では、自分の気持ち、考え信念などが正直に、率直に、その場にふさわしい方法で表現される。そして、相手が同じように発言することを奨励しようとする。」と述べ、園田・中釜 (2010) は「(自他) 相互尊重の精神に基づくコミュニケーション」であるとしている。

近年教育現場では、コミュニケーション・スキルの向上を目指して授業にATの取り組みがみられるようになっており²⁾、これは、教育現場で実際に生徒と向き合っている教師がアサーションの基本概念である「自分も相手も大切にしたい自己表現」の必要性を肌で感じているからであると考えられる。

3. 舞台美術と「相互尊重の自己表現」

では、コミュニケーション・スキル向上の方策について教育の観点から芸術活動を概観すると、まず芸術による教育は、芸術能力の育成と芸術を手段とした人間形成の二つに大別され(前田, 1983)、本研究は後者を研究テーマにおいている。

芸術を手段とした人間形成に関して美術批評家のRead, H. (1943) は、「芸術による」という方法は「感性に訴える方法」でありsensational approach ということばを使い教育の不可欠な手段であると述べている。前田 (1983) は、教育学者春山 (1925) の『芸術教育論』³⁾ を社会教育の観点から報告をし、芸術活動による感情の融和が社会の持続的統一を成り立たしめ、人間形成面での芸術による教育は、感性や感情の陶冶にその役割を有し美的感覚や芸術感覚の習得が社会の秩序において有用であると述べている。

この様に芸術教育によって習得した感性や感情の陶冶が、自身の感情を冷静に受け止め表現することを可能にし、そして、同様の状態で他者を受容する態度も持ち合わせることでコミュニケーション力を高め健全な社会生活を支える要素になるといえる。このことから、コミュニケーション・スキルの向上について芸術を手段とした人間形成を目的とした芸術教育は、人間関係の希薄化により時にはトラブルを招いてしまう現代社会において、必要とされる教育手段である。

次に、舞台芸術の構成要素である舞台美術について、その制作活動には教育的意義を含むと思われる要素が舞台美術家自身の活動を通し語られていることばの中に見受けられる。舞台美術家Adolphe Appia (1862-1928) は、「芸術家の創造する生命は他の生きた人間との生命と

共に働いていると観ずる理論である。そこに協力の精神が生まれ、“生きた芸術は協力を意味する”という。だから生きた芸術は社会的であるといえる。」とし、創造の源は他者に働きかけ受容する力でありそれが芸術を形成しそこには協力という社会性があることを論じている。そして、織田音也（1920-2006）は「舞台美術家は大道具製法の伝統ある技法を理解、尊重して自己の草案に活かす工夫をすべきである。」また、「明示した自己の創意の中で、相手の技術を尊重することが、制作者の技法に成果を委ねるゆとりといえる。」と述べ、舞台芸術に携わる専門家たちとまさに相互を尊重した精神の元、専門家の伝統技術や知識を自身の作品に反映することによって成し得る高い完成を目指す他者受容の姿勢がうかがえる。両者が唱える舞台美術の制作活動における協力という形での他者との関わり、他者の技術知識を尊敬の念をもって受容し自身の作品の質向上を目指して反映する姿勢は、教育的役割の一助と成り得る可能性を示唆している。

本研究の舞台美術模擬授業⁴⁾は、舞台美術の知識や技術の習得と共に人間形成も目的とし、舞台芸術の構成要素である舞台美術の制作工程に準じて行っている。まず、基本となっている舞台芸術活動について述べると、舞台芸術活動は、複数の専門分野が個々の創造を行いながらも演出家を中心に一つの舞台作品を創り上げる総合芸術で特殊な創造活動であるといえる。特に、その一要素である舞台美術は、自身の舞台美術デザイン画がそのまま採用されるのではなく、演出家や他の専門分野と共に互いのイメージや意見を尊重して「美術打ち合わせ」と呼ばれる話し合いを行い、変更や修正が出ても他者意見の方がより適切であると納得した上でデザインの修正を行う。また、自分が舞台芸術作品を創り上げる担い手の一人として、その作品に必要と感じて提案したデザイン要素が仮に受け入れられない状況が生じても共同制作者の理解を得られるように根気強くことばで説明を加えるなど、デザインが決定するまで繰り返し行われる。この「美術打ち合わせ」という話し合いは、より良い舞台芸術作品を創るという共通目的の元、互いの意見や考えを尊重したアサーションの基本概念である「自分も相手も大切にしたい自己表現（以下、相互尊重の自己表現）」に類似していると思われる。

4. 舞台美術模擬授業における合評会

そこで、舞台美術の制作工程でデザインが決定するまで繰り返し行われる「美術打ち合わせ」がアサーションの概念に類似していることから、「相互尊重の自己表現」を行いコミュニケーション・スキルの向上を目的とした実践授業に成り得るものと考え本研究の舞台美術模擬授業では、「美術打ち合わせ」を合評会という形式を採用して行った。「合評」とは、『広辞苑第六版』によると、いく人かの人が集まって同じ問題や作品について批評すること、と説明されている。

舞台美術模擬授業の合評会は、一方的に作品紹介をする発表会とは異なり教材の戯曲を読み、生徒自身が感じてイメージした情景を描き、その描いた作品を基に同級生と意見交換を行う。寄せられた質問や意見は「相手の表現」として受容した上で自分のことばでその場に即し

た形で考えや気持ちを「自分の表現」として伝え、さらに出た意見にも応じるといった「相互尊重の自己表現」に必要な「自分の表現」と「相手の表現」の二側面をもち合わせている。

そして、自分の考えを表した作品に意見をされることによる葛藤場面を乗り越えて、作品意図を理解してもらえるように自分のことばでより良い形で表現する努力も求められる。自分の感情や思いに応じた表現方法や手段が分からない、会話を苦手とする生徒にとっても自身が思い描いた情景、気持ち、考えを表した作品が媒体となり、足りないことばを補うことが可能となって他者に自分の気持ちを表現するという実践体験が、苦手意識を抱いていると思われるコミュニケーションについて気づきを得る機会の場となることが考えられる。また、絵画技術の面から合評会を捉えたと、絵を描くことが得意な生徒はもともと優れた作品である為その自信が動機となり、発言にも自信を抱くことにつながりことばで伝えることの楽しさを覚え、反対に、絵が得意ではないと感じている生徒は、絵では表現しきれなかった伝えたい情景や自分の気持ちをことばで伝える努力が求められ、絵に対する劣等感をも克服した上で他者に理解してもらえた時に感じる喜びがことばで伝えることの大切さへの気づきになるものと思われる。

また、合評会はグループワークの形式をとっており、グループワークに伴いみられる社会的行動や友人同士の情緒的側面に関する実践授業報告⁵⁾から、同級生でグループワークの形式をとっている合評会は、上手く発言できない友人に対して協力などの社会的側面を引き出す可能性を持ち合わせているのではないかと考える。絵が得意ではないが故にことばで伝えることも臆してしまう生徒に対して、聴衆側の生徒が質問や同意をすることで発言を引き出すきっかけにつながっていくのならば、この様な生徒同士の支援行動も対人面におけるコミュニケーション・スキルの向上につながるものと思われる。

さらに、前述した「美術打ち合わせ」に即していることから話し合いを繰り返し行うことを授業計画に組み込み、グループ合評会を2回、クラス合評会を1回の合計3回行っている。この繰り返し行う効果については、第1回合評会で上手く説明ができなかった、又は、相手に不愉快な思いをさせるのではないかと心配してことばを飲み込んでしまい、本当は発言すれば良かったと反省する生徒にとって発言に対する意欲を高めることにつながり、自分の気持ちを伝える自己表現の大切さに気がつくのではないだろうか。そして、第2回、第3回の合評会が設定されていることで、自分が感じた失敗について挽回の機会が用意され学習成果を上げる教訓帰納⁶⁾の要素も含まれるものと思われる。

以上のことから、舞台美術模擬授業での合評会は、日常生活においてことばを話し議論する過程に対して抱いている苦手意識の克服や、他者との意見交換など発言における訓練の場となりえるものとする。そして、この合評会は他者への気遣いや協力を行う社会的側面を有するグループワークの効果や、自身の学習成果の向上に有効である教訓帰納の意味合いも持ち合わせ、「相互尊重の自己表現」を取り入れたコミュニケーション・スキルの向上を目的としている芸術による教育に即した活動である。

5. 本研究の問題と目的

これまで、現代の若者にみられる自己表現の回避や方法が分からないなどのコミュニケーション能力に関わる問題点についてアサーションの概念である「相互尊重の自己表現」の必要性が求められていること、そして、アサーション概念に類似していると思われる舞台美術制作工程の「美術打ち合わせ」に準じて行っている舞台美術模擬授業の合評会について説明をした。

本研究では、高校生を対象に行っている舞台美術模擬授業の合評会が生徒にとって「相互尊重の自己表現」の理解を深める場になること、苦手とされることばによる自己表現や手段がわからないとされている他者とのコミュニケーションの取り方について、スキルの向上につながり必要性への気づきの機会になるかについての検討を行う。そして、舞台美術制作を特殊な舞台芸術の世界だけに留まらず、コミュニケーション・スキルの向上を目指した教育手段の一つとして、その可能性を探ることを目的としている。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象者

埼玉県立G高等学校に在籍する高校1年生41名（男性3名、女性38名）を対象とし授業の出席者を被調査者とした。

2. 対象授業と調査期間

調査対象となる「舞台技術入門・舞台美術編」授業（舞台美術模擬授業）の開講時期は、2013年10月から2014年2月に毎週水曜日の2限目（10：00～10：50）と10分間の休憩後の3限目（11：00～11：50）の連続授業形式で15回行われた。第1回質問紙調査は2013年12月4日、第2回質問紙調査は2014年1月8日、第3回質問紙調査は2014年2月19日で、全て授業時間内にて行い所用時間は約15～20分であった。

3. 調査についての留意点

アンケート調査は授業内容の向上を目的とし研究資料として活用すること、そして、答えたくない質問は拒否をしてもかまわないということ、個人の特定や成績に影響することは一切ないので何ら不利益は生じないということ、クラス全員にアンケート用紙と共に口頭で告げた。

4. 調査用紙の構成

4-1 第1回質問紙調査

本研究において、合評会未経験時点での生徒の気持ちや取り組み姿勢を把握する必要がある為、まず「(1) グループ合評会をするということはどう感じましたか。」の質問項目を設定し、次に「(2) グループ合評会をしてどう感じましたか。」「(3) その他、グループ合評会について

て感じたことを自由に書いてください。」の順で自由記述による回答を求めた。

そして、「相互尊重の自己表現」の観点から(4)合評会をして経験したと感じたことについての自由記述、(5)合評会体験尺度「経験」6項目、(6)合評会をして自分自身のどのような点がどのように変化したかについての自由記述、(7)合評会体験尺度「変化」5項目の質問を行い(5)(7)の合評会体験尺度は「1. 全くあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. ややあてはまる」「5. 非常によくあてはまる」の5段階で評定を求め何れも得点が高い程評価が高いことを示す。尚、合評会体験尺度は予備調査にて合評会経験者の高校生と大学生に半構造化面接を行い収集した意見を心理学教員と数名の大学院生によってKJ法に準じた方法で「合評会をして経験したと感じた点」の「経験」6項目と「合評会をして自分自身が変化したと思われる点」の「変化」5項目に分類した。信頼性は順に α 係数.761、 α 係数.767である。

4-2 第2回質問紙調査

第1回グループ合評会を経験し感じたことや他者からの指摘により気づいた点をフィードバックしてから2回目のラフ画を作成した。そして、2回目のラフ画をもとに行った第2回グループ合評会後の第2回質問紙調査では、「(1) 2回目の合評会をするということをどう思いましたか。」「(2) 2回目の合評会をしてどう感じましたか。」「(3) その他、合評会について感じたことを自由に書いてください。」の順で自由記述による回答を求めた。(4)(5)(6)(7)については第1回質問紙調査と同様に回答を求めた。

4-3 第3回質問紙調査

1回目のラフ画作成、第1回グループ合評会、2回目のラフ画作成、第2回グループ合評会の経緯を踏まえ、また、第2回グループ合評会からの気づきなどフィードバックをしてから水彩の着彩による完成画をもとにクラス全体で第3回クラス合評会を行った。合評会後の第3回質問紙調査では、「(1) クラス合評会をするということをどう思いましたか。」「(2) クラス合評会をしてどう感じましたか。」「(3) グループ合評会をした後にクラス合評会をすることについて感じたことを自由に書いてください。」の順で自由記述による回答を求めた。(4)(5)(6)(7)については第1回・第2回質問紙調査と同様に回答を求めた。

5. 使用教材

Thornton Niven Wilder (ソーントン・ワイルダー) 原作『The Long Christmas Dinner』を大学での演劇実習用に中野成樹が潤色した「家族でお食事ゆめうつつ」を使用した。この戯曲は、一つの家族が90年の時間経過の中で世代を超えて繰り返し経験する家族との死による別れ、生命の誕生による新しい家族との出会いについて書かれた作品である。「家族」「死」「生命」「絆」について、生徒は戯曲の中で書かれている日常と自分自身を同時に感じ取ること

ができ、また、テーマが限定されず個々に感情を抱くことが可能な要素を含んでいることから使用した。

6. 舞台美術模擬授業の流れ（表1）

6-1 テーマの読み取りから第1回ラフ画の作成（1回～6回）

受講する生徒は舞台美術制作に関して初学者である為、初めに講義を行った（1回～4回）。その後、脚本『家族でお食事ゆめうつつ』を配布しクラスで配役を決めて読み内容の確認を行った（5回）。戯曲のテーマの読み取りは、舞台美術デザインのイメージ構築と共に他者との共同作業に於いて自分の考えを明確にする重要な位置づけとなっている。その為、戯曲を読んで自分は何を感じどの様なイメージを抱いたか、この作者は何を伝えたかったかなど戯曲研究・デザイン作成シートを教材として準備し個々に取り組む時間を設定した（6回）。そして、感じたことやイメージした情景が明確になった時点で第1回ラフ画の作成にとりかかった（6回）。

6-2 第1回ラフ画による第1回グループ合評会（7回）

第1回ラフ画による第1回グループ合評会を行った。初めに、この合評会は自分も他者も相互を尊重した自己表現をすることを目的にしていると告げた。それから、人数が均等になる様にグループ分けをして合評会の実施方法を説明した。発表順はグループ内生徒同士で決め、発表者は一人約10分間の持ち時間で戯曲研究・デザイン作成シートを参考にしながら自分の考えや気持ち、表現したいことなどを自由に発表し、聴衆側の生徒は、発表を最後まで聴いてから意見や質問をする様に指示した。その際、発表者、聴衆側の生徒は共に①自分の考えも相手の考えも大切なものである②答えられない質問や答えたくないと感じた時には自分の気持ちを尊重しその様に表現をする③言われた意見に対して否定的にならない④自分の気持ちを明確にしてから発言する⑤声の大きさや話し方のスピード・表情・視線についての教示を行った。

6-3 第1回グループ合評会のフィードバックと第2回ラフ画の作成（8回）

第1回グループ合評会後の授業では、合評会で出た自分の作品に対する同級生の意見や評価と、意見交換の際自分の考えや気持ちを思った通りに発表できたかなど、合評会を経験し感じたことや気がついたことをフィードバックしてから第2回ラフ画の作成に取り組んだ。

6-4 第2回ラフ画による第2回グループ合評会（9回）

第2回グループ合評会は第1回の反省点を挽回することを目的とし、第1回合評会で絵に対する苦手意識から上手く説明できなかったと感じた生徒には、絵では伝えきれない部分をことばで補えることができるということへの理解と努力を促し、絵と共に楽しく発表が出来たと感じた生徒には、他者が聴きやすい話し方を意識して第2回合評会に臨むように伝えた。

表1 舞台美術の制作工程に準じて行われた「舞台美術模擬授業」の流れ（2013年度秋学期「舞台技術入門・舞台美術編」）

実際に行われている舞台美術制作工程	舞台美術模擬授業 授業計画（全15回）		
舞台美術制作にあたり必要とされる 主な知識・技術と制作工程	回数	授業日	主な授業内容と調査実施日
舞台専門用語・尺貫法の知識	1	10月 9日	〈舞台美術について〉 概論・歴史
劇場・舞台設備についての知識			共同制作者との関わりについて
製図に対する知識・技術	⇒ 2	10月 30日	〈劇場・舞台設備について〉 講義
舞台デザイン画作成の技術	3	11月 6日	〈舞台空間について〉 講義・演習
	4	11月 13日	〈絵画と舞台装置画の表現の違い〉 演習
戯曲のテーマの読み取り・イメージ化	⇨ 5	11月 20日	〈戯曲より舞台デザイン画作成〉 実習
舞台美術イメージデザインのラフ画作成	⇨ 6	11月 27日	戯曲研究シートの作成～第1回ラフ画作成
第1回 美術打ち合わせ	⇨ 7	12月 4日	第1回ラフ画による第1回グループ合評会（第1回質問紙調査）
第1回 美術打ち合わせを踏まえた デザインの修正	⇨ 8	12月 18日	第1回グループ合評会のフィードバック →第2回ラフ画作成
第2回 美術打ち合わせ	⇨ 9	1月 8日	第2回ラフ画による第2回グループ合評会（第2回質問紙調査）
第2回 美術打ち合わせを踏まえた デザインの修正	⇨ 10	1月 15日	第2回グループ合評会のフィードバック →完成画作成①（下描き～着彩）
舞台美術デザイン完成画の作成	⇨ 11	1月 22日	完成画作成②（着彩までの仕上げ）
	12	1月 29日	完成画作成③（着彩までの仕上げ／完成）
完成画による	⇒ 13	2月 5日	完成画のクラス合評会（前半20名）
第3回 美術打ち合わせ	14	2月 12日	※試験日の為、別室にて舞台備品の確認授業
	15	2月 19日	完成画のクラス合評会（後半21名） （第3回質問紙調査）

注 実際の舞台美術の制作工程に基づき進行内容に対応して授業を実施した。「美術打ち合わせ」の回数はその内容によって様々であるが通常2回以上は行われる為、授業回数と兼ね合わせここでは3回の美術打ち合わせの形を提示した。

そして、第1回と同様に発表者と聴衆側が共に相互を尊重する自己表現を目的としていることも伝えた。実施方法も第1回と同じ形式で行った。

6-5 第2回グループ合評会のフィードバックと第3回完成画の作成（10回～12回）

第2回グループ合評会後の授業では、第1回の反省点を挽回できたかなど振り返りを行い、第1回・2回グループ合評会の発表で経験し感じたことや作品の向上に繋がると思われるアドバイス第3回完成画に向けフィードバックしてから作画に取り組んだ。

6-6 第3回完成画によるクラス合評会（13回、15回）

初めに、第3回クラス合評会は第1回・2回グループ合評会で感じ経験したことを踏まえ、

発表者と聴衆側が相互を尊重する自己表現を行うことを目的にしていると伝えた。第3回クラス合評会の実施方法は、完成画を無作為に裏向きで回収して重ねさらに教壇でクラス全員の前で数回シャッフルをした後、一番上になった作品の生徒から発表を行う方式をとった。次の発表者は、発表が終わった生徒が裏向きに重ねてある作品の一番上にある生徒の名を読み上げる形で進行をした。発表者は一人約5分間の持ち時間で、作品に対する自分の考えや気持ち、表現したいことなどを自由に発表し、また、2回のグループ合評会を経験し変化した点などがあったら発表に加える様に求めた。そして、聴衆側の生徒は、発表を最後まで聴いてから発表に対する意見や質問を行い相互の考えを尊重した上での意見交換をする様に指示をし、第1回・第2回グループ合評会で教示した内容を再度伝えた。

Ⅲ. 結果と考察

1. 合評会体験における、経験と変化について

対象となった3回の合評会の評価を表2に示した。「相互を尊重する自己表現」を基に合評会を行い生徒が合評会をして経験したと感じた点の「経験」と自分自身が変化したと思われる点の「変化」（以下、「経験」「変化」と表記）の2つの観点から検討を行う為、舞台デザイン画の作画、合評会、質問紙調査の3回全てに出席した生徒を対象にt検定（片側検定）を行った。

表2 合評会体験により感じた「経験」と「変化」の平均点と標準偏差

	第1回質問紙調査 (N=33)	第2回質問紙調査 (N=33)	第3回質問紙調査 (N=33)
経験	26.21 (2.74)	25.24 (3.46)	26.48 (2.80)
変化	19.85 (2.49)	20.27 (3.21)	21.27 (2.08)

表中の数値は平均値を示す。() 内の数値は標準偏差を示す。

その結果、「経験」は、第3回質問紙調査の方が第2回よりも有意に高かった ($t(32) = 1.84, p < .05$)。第1回から第2回は評価得点の平均点が下がり（表2）、第1回合評会は初めての体験であることから興味をもって臨んだが第2回では興味が減少したものと考えられる。しかし、回数を重ねることは経験を積むことに繋がり、面と向かい他者に率直に意見し自己表現を行う状況は生徒にとって日常的には稀なことであると思われる。その稀な経験が第3回では上方に転じ、これは、生徒の中で希薄であった他者意見の存在に目が向けられ他者から学ぶことを経験したと感じたものといえる。第3回質問紙調査で「中々味わえない良い刺激を与えてくれました。」「アドバイスや質問、感想を言ってもらえる嬉しさ。」など、意見を言うことの楽しさや他者意見を受容することの喜びを感じ取ることができたと思われる記述がみられた。

また、合評会が2回のみであったならば経験に対する評価が下がったままで終わってしまうが3回目で挽回をしたことは繰り返し行うことに意味があり、一度は下がってもそこから何か

を学び取ることに繋がっていく教訓帰納の学習成果の可能性を含んでいるものとする。

そして、「変化」については、第3回質問紙調査が第1回、第2回よりも有意に高かった ($t(32) = 3.29, p < .01$)、($t(32) = 1.72, p < .05$)。評価得点の平均点に関しては右肩上がりである(表2) 良好な自分の変化を自覚できていることは、「上手く伝えることができなかったのが、少しずつだけできるようになった。」「人の為に自分の意見を伝えることが大切だと思えるようになった。」との自由記述からも読み取ることができる。良好な変化を自覚できると変化に影響を与えた行為についてポジティブな感情を抱き、明示した目的に近づこうとする気持ちが高まって「変化」について有意差がみられたと考えられる。このことから、相互を尊重した自己表現を目的に繰り返し行った合評会は、他者に自分の意見をうまく伝える様になりたいという気持ちの高まりを築きコミュニケーション・スキルの向上に良い影響を与えたといえる。

そして、評価得点が「経験」は第3回質問紙調査の方が第2回より高く、「変化」は第3回が第1回、第2回より高かった生徒の自由記述を注目すると「変化」について、第1回質問紙調査では「他人の意見に積極的に目を向けようと思った。」第2回は「自分からの視点ではなく周りからの視点を考えて描くというのが大切だと思った。」第3回では「自分が思っているイメージにこだわりすぎず、人の意見を聞くことが大切だと思った。」とある。特に第2回の「周りの視点」という記述は、舞台芸術に置き換えれば最も尊重すべき表現の対象者である「観客の視点」という意味も含まれ舞台芸術の基本姿勢を想起した、まさに舞台芸術の芸術教育としての可能性を指摘したことばが生徒から発せられたのは興味深い結果といえる。

2. 合評会体験に対する生徒の取り組み意識から経験と変化を見る

次に、生徒の取り組み意識からの変化をみる為、第1回質問紙調査の自由記述「(1) グループ合評会をするということはどう思いましたか。」という合評会未経験時点での回答より「意見を聞いてまた新たな発見ができると思った。」「みんなのイメージを聞けるのでわくわくした。」などの回答をした「積極的態度」と、「最初は嫌だなと思った。」「少し恥ずかしいと思った。」の回答をした「消極的及びその他の態度」に分類し t 検定 (片側検定) を行った。

表3 積的態度の生徒の「経験」と「変化」の平均点と標準偏差

	第1回質問紙調査 (N=15)	第2回質問紙調査 (N=15)	第3回質問紙調査 (N=15)
経験	26.87 (2.26)	25.20 (3.23)	26.80 (3.21)
変化	20.73 (2.05)	21.00 (2.98)	21.93 (2.37)

表中の数値は平均値を示す。() 内の数値は標準偏差を示す。

その結果、「積極的態度」の生徒の「経験」については第1回質問紙調査から第2回へ評価得点の平均点が下がった(表3)が、「人前で自分の意見を言う難しさを経験しました。」と自

由記述にみられた「相互尊重の自己表現」に対する「難しさ」の気づきによるものである。これは、積極的態度で取り組んでいたからこそその気づきであり、大切なことはその後の生徒の授業に対する興味や取り組み姿勢の維持を支える授業内容に関わる指導の在り方を求める結果である。

しかし、第3回質問紙調査は第2回よりも有意に高かった ($t(14) = 2.05, p < .05$)。これは、積極的態度で授業に臨んでいたことが支えとなり「皆の前で意見を言うのは緊張したけど、良い経験をしたと感じた。」という自由記述もあることから、一度は評価得点が下がったものの、合評会を通じ人前で意見を言うことが自分の成長を促すことと感じ取ることができ「難しさ」が「大切なこと」という気づきに変化して、結果としてやって良かったと感じられる経験をするのができたと考えられる。積極的態度で臨み、第2回質問紙調査から第3回で「経験」の評価得点が上がった生徒が敢えて人前で発言する難しさを報告しているが、これは、その難しいと感じたことに対する克服をその後の課題と課した向上心からのものであると考えられる。また、他者からの意見を教えと好意的に受け止めた「自分が考えていることより深く考えることを教えてもらった。」という自由記述は、「相互尊重の自己表現」を目的としたコミュニケーションの理解につながるものである。

そして、「変化」は評価得点の平均点は右肩上がりである(表3)、第3回質問紙調査が第1回よりも有意に高かった ($t(14) = 1.96, p < .05$)。積極的態度で合評会に取り組んだ生徒が良い変化を示したことは、コミュニケーション・スキルの向上を目的とした実践授業形式の合評会体験が有意義なものと感じることができたといえる。そこには、個人の努力に加えてグループやクラスの良い人間関係も要因となっていたものと考えられる。率直に意見を言える仲間との良い関係性も「相互尊重の自己表現」には欠かせない要素となる。それにはやはり他者との良好な関係を築くコミュニケーション能力が必要となることを改めて考えさせられるのである。

「消極的及びその他の態度」(表4)の生徒は、「経験」に有意差は見られなかったが、「変化」については高い水準で第3回質問紙調査の方が第1回よりも有意に高かった ($t(17) = 2.59, p < .01$)。授業当初が消極的態度であったということは上方に転じる可能性を持ち合わせている。そして、本来発言をしたい気持ちを自分なりの理由で自制していたということも考えられる。それが、合評会で発言をするという行為に伴った感情が本人にとって良好であった為、積極性を引き出す引き金になったのであれば、それは、舞台美術の制作工程で行われる「美術打ち合わせ」に準じ実施した舞台美術模擬授業の合評会体験がコミュニケーション・スキルの向上に良い形で影響を与えたといえる。

表4 消極的・その他の態度の生徒の「経験」と「変化」の平均点と標準偏差

	第1回質問紙調査 (N=18)	第2回質問紙調査 (N=18)	第3回質問紙調査 (N=18)
経験	25.67 (3.03)	25.28 (3.73)	26.22 (2.46)
変化	19.11 (2.63)	19.67 (3.36)	20.72 (1.67)

表中の数値は平均値を示す。() 内の数値は標準偏差を示す。

「自分は気になった部分はガンガン言わないと気がすまない性格なので、もしかしたら色々聞きすぎたかもしれないと思う様になった。」と、自分の性格を分析し他者を気遣うようになったとみられる記述をした生徒がいた。自己表現には攻撃的自己表現・非主張的自己表現・アサーティブな自己表現の3つがある(平木, 2000)とされ、この生徒は自分が攻撃的自己表現をしてしまうが「相互尊重の自己表現」を知り行う様になった変化を感じていると考えられる。

3. 合評会体験による得点の変化について

さらに、合評会を体験することによる生徒の得点変化を見る為、第1回質問紙調査で得た合計得点を基に「高群」「中・低群」に分類をし(図1・2) *t*検定(片側検定)を行った。

その結果、「中・低群」の生徒の「経験」は、評価得点の平均点に関しては右肩上がり得上昇し(表5)、第3回合評会の方が第1回合評会よりも有意に高かった($t(16) = 2.38, p < .05$)。

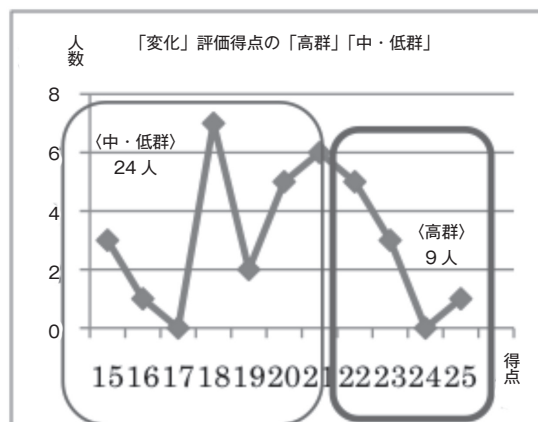
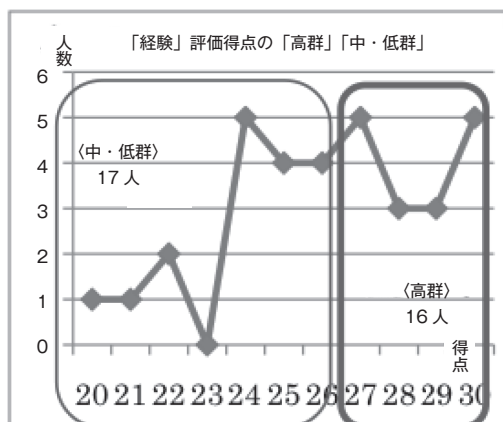


図1 第1回質問紙調査「経験」の評価得点による高・中低群

図2 第1回質問紙調査「変化」の評価得点による高・中低群

表5 第1回質問紙調査評価得点 中・低群の「経験」と「変化」の平均点と標準偏差

	第1回質問紙調査	第2回質問紙調査	第3回質問紙調査
経験 (N=17)	24.06 (1.82)	24.82 (3.19)	25.41 (2.50)
変化 (N=24)	18.79 (2.00)	20.17 (3.14)	20.88 (1.83)

表中の数値は平均値を示す。()内の数値は標準偏差を示す。

中・低群の生徒は、「経験」の評価得点が第1回は低かったが、第3回で「人の意見を聞いて良いと思ったところは作品に反映する。」との記述があり、これは、他者の作品を見たり話し合ったりして良いところを取り入れる合評会経験が他者受容に繋がり「相互尊重の自己表現」の理解の兆しであると思われる。第1回質問紙調査で「何も考えずに描いた」と記述した生徒がいたが、この無意識と取れる行為は日常生活でも他者への態度や発言の中で起こり得ることで、本人の意志とは関係なく相手の気分を損ねてしまいそれがコミュニケーション能力の不足ということになる。しかし、第3回では「自分で考え作品に向き合うという経験が出来た。」と「無意識」から「意識して行う」ことへ変化をし「絵だけではなくコミュニケーションについても学ぶことができたと思う。」とあった。舞台美術の創作活動を通して「意識して」自分の行動をとる様になり、それを対人場面にも関連をさせて考えるきっかけとなったことは、コミュニケーション・スキルの向上について舞台美術模擬授業の合評会効果があったものといえる。

そして、「変化」についても評価得点の平均点は右肩上がりの上昇し(表5)、第2回質問紙調査の方が第1回よりも有意に高く($t(23) = 2.30, p < .05$)、第3回の方が第1回よりも高い水準で有意であった($t(23) = 4.71, p < .001$)。第1回で「考えていないところを考えておかないといけないなあと思えた。」と記述した生徒は、第3回で「前はとにかくかみついていました。今回は意見を聞いてから自分のアイデアを言う様にしました。」と他者へ意見をする態度について「変化」の傾向にあることが感じられる。これは、「変化」したかもしれないと感じた理由を知ることが、その後の向上に繋がったのではないだろうか。第1回合評会で自分の考えをしっかり持つことや他者意見を受容することに気づき、それが自分にとって大切なことだと明確になったことがその後の成長の足掛かりとなっていき、第2回、第3回合評会で変化した点をその後も実践していくことで、最終的に他者に対する良い形での意見ができるようになっていったと考えられる。

そして、「高群」の生徒の「経験」については、評価得点の平均点は第1回質問紙調査が最も高い谷型となり(表6)、第3回の方が第2回よりも有意に高かった($t(15) = 1.95, p < .05$)。「変化」について有意差は見られなかった。

表6 第1回質問紙調査 評価得点 高群の「経験」と「変化」の平均点と標準偏差

	第1回質問紙調査	第2回質問紙調査	第3回質問紙調査
経験 (N=16)	28.50 (1.26)	25.69 (3.79)	27.63 (2.70)
変化 (N=9)	22.67 (1.00)	20.56 (3.57)	22.33 (2.45)

表中の数値は平均値を示す。() 内の数値は標準偏差を示す。

第1回の「経験」が高い評価得点を示したことは、生徒や指導する側にとって望ましいことである。しかし、繰り返し行うことについてやって良かったという意見はあったものの「正直またやるの?」と思っていたけど、みんなの作品を見ていくうちに自分の中で色んなアイデアや疑問が生まれてとても良かった。」という多少の厭きの様な抵抗感も自由記述から読み取られ、第2回で得点が下り第3回で上昇はしたものの第1回の得点まで挽回はしなかった。このことは、何を目的として行っているかその意味が生徒には完全には理解できておらず、ただ繰り返し行うことでは成果が得られないことの現われであると考えられる。指導する側の授業目的を伝え続ける姿勢、そして、生徒と指導する側の目的意識の共有も必要とされる結果である。

IV. まとめと今後の課題

本研究では、舞台美術制作工程の「美術打ち合わせ」に準じて行っている舞台美術模擬授業の合評会が「相互尊重の自己表現」について実践を通して理解するきっかけとなり、コミュニケーション・スキルの向上につながる教育手段に成り得るかその可能性について「経験」と「変化」の2つの観点から検討を行った。

まず全体をみると、「経験」について意見を言うことの楽しさや他者意見の受容が向上に繋がることへの発見ができたとされる結果を得たが合評会を繰り返し行う必要性が伴っていた。そして、「変化」については、順調に良い傾向を示し意見や発言をすることに対して良好な変化の自覚が更なる変化を後押していることがわかった。第1回合評会後の調査結果から評価得点の中・低群に属した生徒は、合評会の回数を重ねるうちに他者受容の理解が深まり同時に相互を尊重した自己表現の大切さに気づいたものと思われる。このことから繰り返し行う必要性と、高群の生徒の結果から繰り返し行うことに対する目的意識を持つことの大切さも得られた。アサーションの概念に類似した舞台美術制作工程の「美術打ち合わせ」は、参加者がより良い舞台芸術作品を創るという共通目的で「相互尊重の自己表現」に基づき幾度も話し合いを行っており、本研究の調査結果からこの様な形で話し合いを行う舞台芸術の創造過程は、コミュニケーション・スキルの向上について教育手段としての可能性があるものといえる。

また、第1回合評会を積極的態度で臨んだ生徒は、他者に自分の意見を言うことに「難しさ」を感じていたということがわかった。これは、日常で他者に面と向かい相手を尊重した上で自分の意見を言う経験が少ないことの現われである。積極的態度と消極的及びその他の態度

の生徒は何れも合評会という実践授業が有意義な場であったとの認識から良好な変化に繋がったと思われる。そして、第1回合評会後の調査結果による中・低群の生徒は、自分の向上につながる理由を理解することが良好な変化に結びついたものと考えられる。

以上のことから、コミュニケーション・スキルの向上について、知識を得、理解を深めると共に、実際に他者と面と向かい合い自分のことばで意見をし合う実践の場が必要であり、日常生活において自己表現が苦手な生徒にとって互いが平等な立場にいる授業は有効な場であると思われる。そして、自分の考えを反映した作品を基に「自分の表現」と「相手の表現」を持ち合わせた舞台美術模擬授業の合評会は、「相互尊重の自己表現」を知り実践を通してコミュニケーションに対する気づきの機会を与えるものとなり、コミュニケーション・スキルの向上を目指した教育手段になり得るものといえる。さらに、本研究にて模擬授業という形で行った舞台芸術活動の一要素である舞台美術制作という活動は、これらの結果からその専門分野に限定するだけに留まらず、コミュニケーション・スキルの向上を目指した教育手段の一つとしても応用が可能な活動となりえるものとする。

今後の課題としては、授業日数の関係で完成画による第3回クラス合評会での一人の持ち時間が5分であることから十分な話し合いを行われないまま意見交換を終了してしまう場合もみられた。今後は、余裕のある時間を確保した授業計画の見直しが必要である。また、学校の授業はお互いが平等の立場であるものだが、生徒同士にしかわからないクラスの環境というものも考えられる。合評会を実施する際は、距離をおいたり会話に入りきれていないと思われる生徒に対しては指導者が細かい気配りを行い、その様な状況への対策の検討も必要である。

そして、結果については積極的態度の生徒の「経験」が、第1回質問紙調査から第2回にかけて下降し、「高群」の生徒は「経験」「変化」について第1回の評価得点が最も高かった。初回に高い積極性で臨んでいた生徒が継続して授業の目的を把握し、モチベーションを維持できる授業内容の検討が必要である。

【注】

- 1) 自己防衛反応について満野・今城（2013）は、気遣いの観点から大学生の友人に対する接し方を検討し、気遣いの1因子である抑制的気遣いには、トラブルや葛藤を避ける自己防衛的な面と周囲との円滑な対人関を志向する為に行われている面についても明らかにした。
- 2) アサーションの取り組みとして、小学校では言語活動の充実を目的とした国語の授業（鈴木、2013）や、学習面・生活面の充実など総合的な学習の時間としてのコミュニケーション学習（豊田、2013）がある。
- 3) 教育学者の春山（1925）は『芸術教育論』で「芸術による感情の陶冶とは種々なる感情を起るようにするというのではなくて、感情の動き方を調節すること。」と述べている。
- 4) 舞台美術模擬授業とは、高校生を対象とした舞台芸術活動を構成する一要素である舞台美術の実際の制作工程に準じ模して行った授業である。
- 5) 実践授業報告において町・中谷（2013）は、参加生徒が他の生徒が行ったグループ内の逸脱行動

を抑制するという社会的行動がみられたとしており、三宅（2013）は、友人同士の情緒的なサポートや授業外で一緒に勉強をする頻度が上昇したこと報告をしている。

- 6) 教訓帰納とは、問題を解くごとに「ここから何を学んだか」を教訓として取り出すことを指し（植阪, 2013）、教訓帰納を行うことで次の類似した問題行動に成功することが示され（寺尾, 1998）、教訓帰納は学習成果の向上に有効であることがわかると瀬尾（2013）は述べている。

【引用文献】

- Adolphe Appia: (遠山静雄:「アドルフ・アピア」、相模書房、1977、P132)
- 福富 譲: 思春期が人生の中でもつ意味、児童心理 2月号臨時増刊、3-12. 金子書房、1997
- 萩原菜穂美・秋光恵子: 文化祭での集団体験を通じた人間関係能力の変化に関する研究、日本教育心理学会 第55回 発表論文集、2013、P232
- 春山作樹:『芸術教育論』、教育論叢、1925（前田博:「教育における芸術の役割」、玉川大学出版部、1983）
- 平木典子: 自己カウンセリングとアサーションのすすめ、金子書房、2000
- 平木典子: 改訂版アサーション・トレーニング-さわやかな〈自己表現〉のために-、金子書房（日本精神技術研究所）、2009
- 堀 洋道・松井 豊: 学校や交友関係の実態とその影響 学習指導研修 4（2）、1981、90-93
- 磯貝芳郎: 今ふうの友だちづきあい-進行する人間関係の希薄化 磯貝芳郎（編）上手な自己表現、有斐閣選書、1992、Pp.1-23
- 前田 博:「教育における芸術の役割」、玉川大学出版部、1983
- 増淵（海野）裕子: 大学生における「ひとりの時間」の意義、日本教育心理学会 第55回発表論文集、2013 S101
- 町岳・中谷泰之: 算数グループ学習における相互教授法の介入効果（3）～児童の向社会的行動がグループの話し合いに与える効果～、日本教育心理学会 第55回発表論文集、2013、p20
- 満野史子・今城周造: 大学生の友人に対する気遣いとストレス・友人満足感の関連、日本教育心理学会 第55回 発表論文集、2013、S272
- 三宅幹子: 心理統計演習授業におけるグループワークの活用-授業への取り組み方と友人との学習活動の観点から-、日本教育心理学会 第55回 発表論文集、2013、P613
- 織田音也:『舞台美術を考える』、日本放送出版協会、1977
- Read, H.: 宮崎理・岩崎清・直江俊雄（訳）「芸術による教育」、フィルムアート社、2001
- 瀬尾美紀子: 中学校教育プログラムの開発、日本教育心理学会第55回発表論文、2013、S59
- 園田雅代・中釜洋子: 子どものためのアサーション・グループワーク、日本・精神技術研究所 2010
- 鈴木教夫: ～小学校の授業事例から～、日本教育心理学会 第55回発表論文集、2013、S73
- 寺尾 敦: 数学学習における誤りからの「教訓帰納」の内容と学業成績との関係についての実験的事例と考察、日本教育工学雑誌 22（2）、1998、119-128
- 富田英司: 大学の大人教教室で議論力を養う授業方法とその改善 日本教育心理学会 第55回 発表論文集、2013、S46
- 豊田英昭: ～小学校総合的な学習の時間の事例から～、日本教育心理学会 第55回発表論文集 2013、S73
- 植阪友里: 個別学習相談を通じた支援、日本教育心理学会 第55回発表論文集、2013、S58
- 山本肇・菅野純: 大学の寮生と寮外生における精神的健康度と関連要因との比較検討、日本教育心理学会 第55回 発表論文集、2013、241